

巻頭言

エア・アンド・スペース・パワー研究をお手に取っていただき、ありがとうございます。

航空研究センターは、エア・アンド・スペース・パワーを中心とした安全保障に関する研究成果を発信することにより研究能力の向上を図るとともに、自由闊達な意見交換の機会を提供することを目的として、本誌を発行しています。

また、毎年度末に、航空宇宙防衛力シンポジウムを開催し、各国空軍を含む国内外の研究者等と研究発表及び意見交換を行い、研究成果を発信するとともに、今後の研究等に資する知見や情報を取得しております。

昨年度のシンポジウムは、「大国間競争時代のエア・アンド・スペース・パワー ～ウクライナ戦争の教訓～」をテーマとして、小泉悠先生を基調講演者としてお招きし、「ウクライナ戦争とインド太平洋地域の国際秩序」、「ウクライナ、宇宙時代の戦場」、「エア・パワーの新たな地平」について、各セッションでそれぞれ議論し、大変有意義な意見交換ができました。

議論の中では、ウクライナ戦争において、これまで我々が考えていたような、航空優勢を確保して、その優勢下において様々な戦力を発揮するという戦い方とは違った様相が繰り返されていることが指摘されました。この背景には、これまでのエア・パワーの考え方がアメリカの戦い方、すなわち攻撃的な役割で有用性が語られてきたこと、そしてウクライナとロシアがもともとソ連の戦い方の思想を源流に置いていること、ドローンなどの新たな装備品が出現したこと、更にそういった戦い方に迅速に適応するための組織づくりがなされてきたことなどがあると考えられます。ウクライナ戦争の現実から、これまで培われてきたエア・パワー理論が、実戦とそぐわない側面が出現していることから、今こそエア・パワーの理論と実践について、改めて考え直してみることは価値があると考えます。

航空自衛隊は、専守防衛の国是のもと、防空を任務としてこれまで防衛力を構築してきました。我々航空研究センターは、米豪をはじめ、各国空軍や有識者等としばしば意見交換をしておりますが、防空システムを重層的に配置する IAMD (Integrated Air and Missile Defense) 能力や、空の利用やア

エア・アンド・スペース・パワー研究（第13号）

クセスを拒否する「エア・ディナリアル」は、実はこれまで航空自衛隊が築き上げてきたものであり、トレンドの最先端と言ってしまうかもしれませんが、各国空軍から注目を集めているのは事実です。

このような観点から、本誌は「エア・パワーの新たな地平」を特集テーマとして、シンポジウムの議論の延長と位置づけ、改めてエア・パワーについて思考する場を提供することとしました。そのため、本誌は、シンポジウムで基調講演をいただいた小泉悠先生をはじめ、パネリストとして活躍した航空研究センター員が多数投稿し、エア・パワーについて新たな視点から言及しております。

「ソ連・ロシアのエア・パワー思想」（小泉悠先生）では、我が国の防衛もその影響を受けているソ連・ロシアのエア・パワーが、政治的・経済的・技術的その他の制約を受けつつ発展してきたその実態について、明らかにすることを試んでいます。「エア・パワー研究のこれまでと将来」（田中）では、まさにエア・パワーの実相とこれまでの研究の乖離を指摘し、エア・パワーに係るこれまでの議論を整理し、今後のエア・パワー研究の論点や方向性について言及しています。「ソ連防空軍の変遷」（山田（雄））では、ソ連防空軍について、エア・パワーの発展、西側の動向やソ連の軍事戦略の変遷を考慮しつつ、軍事組織の機能分化・退化の観点から、その萌芽、独立から弱体化までの分析を試んでいます。「ウクライナ戦争に見るエアパワーの『理論と実践』（佐久間）では、ウクライナ戦争をはじめとする昨今の戦いにおいて、「空のコントロールと利用」に関する変化を指摘し、この変化を理論的に捉え、「空のコントロールと利用」の可視化を試みた「2つのパリティ・モデル」を提供しています。「ウクライナの戦争継続要因」（渡邊）では、ウクライナ戦争で注目されているドローンの活用について、航空阻止に焦点を当て、戦争の経過とともにウクライナの適応プロセスを明らかにし、粘り強く戦い続けている要因を明らかにしています。このように、特集テーマでエア・パワーについて、これまでとは違った観点で論じている点は興味深いのではないかと考えます。

また、本誌では、特集テーマに加え、自由論題の枠を設け、安全保障に関する幅広い研究も取り上げ、将来の我が国の安全保障を考察する一助となるよう心掛けました。特に、本号では、国際関係の戦略的な分野から、国際法、そして公共インフラの軍事利用という戦術的な分野まで、幅広く、安全保障の課題等を取り上げています。

「中露パートナーシップの利点」(武内)では、中露関係がパートナーシップから軍事同盟に発展するの否かについて、期待効用理論の3つの効用関数から分析し、今後の中露関係について言及しています。「スウェーデン及びフィンランドの NATO 加盟に関する考察」(根岸)では、これまで伝統的に中立の立場を堅持してきた両国が、同時に NATO 加盟申請に至った背景について分析しています。「国際海峡の通過通航権と外国航空機」(山田(尊))では、これまでさほど注目されてこなかった国際海峡における通過通航権による航空機の上空飛行について、領空主権の絶対性が一部例外的に認められる問題について指摘し、国際海峡の「意図的なあいまいさ」を逆手にとりて利用する可能性について言及しています。「人工衛星に対する電磁波妨害の法的整理」(佐々木)では、武力紛争前の衛星に対する電磁波妨害が、現行の国際法上、国際社会においてどのように認識されているのかについて明らかにし、我が国が留意すべき課題について指摘しています。「公共インフラの軍事的利用について」(佐伯)では、圧倒的な数のミサイル攻撃に対して、継戦能力を確保し粘り強く戦闘するために、高速道路を代替滑走路として利用することについて提示し、諸外国に共通して見られる特徴について分析し、その際の必要条件について指摘しています。

以上、エア・パワーに加え、安全保障に係る様々な分野の論稿を掲載しております。これらの記事をお読みいただき、読者の方々に、安全保障や航空自衛隊の将来について関心を寄せて頂くとともに、ご意見等をいただければ幸いです。今後も、航空自衛隊の知的精強性向上の中核を担う航空研究センターの発展に努力して参る所存であります。

最後に、本号にご玉稿をお寄せくださった執筆者をはじめ、ご協力頂いた方々に心より感謝申し上げますとともに、今後とも航空研究センターの諸活動にご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

『エア・アンド・スペース・パワー研究』編集委員長
 航空自衛隊幹部学校 航空研究センター長
 空将補 世良 達裕